

思い出すこと

寺谷 美喜子

中央五丁目

井戸堀り

昭和十七年の頃であつたらうか、消火用に隣組に井戸を一つという事になった。場所がなかなか決まらなかったが、各家の中間点でT字形の横丁の門に堀る事になった。少し上り坂の上である。

要員は我々という命令。只々驚いたが、絶対服従の時代、何を手伝うのか想像もつかなかった。

いよいよその日になった。プロの人が、確か男二人と女一人来たかと思う。定めた場所を堀ってゆくのを見守っていた。

深くなってくる。下に降りた人が堀った土を大きいバケツ(だつたと思う)に入れて綱つなに結び付ける。我々の出番だ。合図がくると、ソレーノと我々が一列になって引つ張りあげる。いわゆるエンヤ・コーラである。女ばかり老人も加えて各戸一名ずつ八、九人、度重なつてくると大変な労働だ。力一杯綱を引つ張つて土を外へ出す。

プロの命令通り和気あいあい働いた。汗まみれでくたくた

になったが、役には立ったらしい。一人だけで上手に降りている人が一番偉いらしい。威張っていた。上がってきた時に汗拭きの手拭を、仲間が捧げ持つて渡していたからとても印象に残った。

堀った穴には、大きな長目の底のないズン胴の木の桶のような物を重ねて入れていた。仕上げの段はよく覚えていないが、手押しポンプがつけられて出来上がり。とても上出来だと思つた。

夏は冷たい水で、もてなし用に助かったし、おいしかった。当時は水質検査もしないが、誰も何事もなかったと思う。

戦後はあまり利用されなくなった。わざわざ水を汲みにいくより水道である。だんだん井戸の具合も悪くなったから……中の枠は木だもの、傷んできたのは目に見えている。ポンプもきつと大したものではなかったのだから。大分たつてから、いつの間にかポンプは外され、穴は埋められてしまった。

生まれてから最初で最後のエンヤ・コーラの体験は、我々の

みであつたらう。被災を逃れた地区だったので、この水は消火には一度も使われなかった。

その時のメンバーは、今では殆ど鬼籍に入って居られる。

防空演習

「火叩き」。竹竿の先に縄を何本か房の様につけたもので、とんと「全くの意味」はたきの親玉の如きものだ。それで火を叩いて消す用具である。

或る日、我が家の前の横丁で訓練があつた。姿はモンペにゲートルを巻き、頭は手拭でしぼる。町会の係の男性が数人やつてきた。「爆弾投下」の声と共に、目と耳を両手で押さえて地面に伏す。親指で耳、中指で目を押さえる。訓練に出るのは老人も共に女ばかり。モタモタしながらイザの時の形を覚えた。爆弾が投下されたら、ふっ飛んでしまうのでは……等思いながら。次に油脂焼夷弾投下の設定、白墨で板塀に強く何か所も印をつける。それを火叩きで消せというのだが、古い板の木目深く入った白墨は、上からこする位ではとても消えぬ。火叩きの長い竿を持ち不安定な形でこする。

「まだまだ燃えている」の声、油脂焼夷弾はともしつこいそうだ。乾いた縄だから、白墨は表面をこするばかりで取り切れない。仕方なく次に進む。

負傷者が出た。地面に伏している我々に怪我の状態を書いたものを付け、それによって各部を三角巾でしぼり、応急手当を

する練習である。

一番ひどい怪我は、どういいうわけか私ということになった。男の人がタンカを持ってきて、胸のあたりを三角巾で縛られた私に乗れという。断りたくても代わってくれる人もいない。今の総合病院まで行くという。二人が前後に、脇に一人が付き添って出発。

途中ジロジロ見られながらで、きまりが悪かった。当時一等若くて体重のすごい私を乗せて行くうち、ウンウン言いながら三人が交代しつゝ進む。次第に速度は遅く交代はのべつとなつた。何とか軽くしようと考えたがどうなるものでもない。やせた老人なら楽なのに、何で私が……と、切なかつた。「重いから申し訳ない、歩きましょう」と申し出たが、きまりだからとて許されず、やつと病院についたとたん「帰っていい」。

あつけにとられながら夕方の家路を急ぐ。一日が終わつた。今思えば担いでくれた男性達も兵隊に取られていないやさ型だったか、あまり記憶にない。みな忠実な区民達だった。

塀の白墨は深く入り込んだまま、いつまでもなかなか消えなかつた。